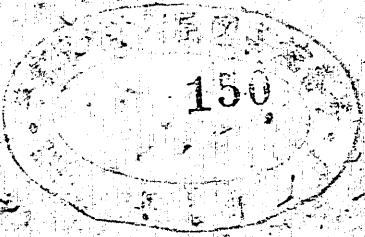


150
九月十一日
益信齋
御用留記
大坂御府
東水四年
余休

益子家
150
P3



南都大佛尊像

高 五丈二尺六寸

面 一丈六尺

廣 九尺六寸

肩 九尺二寸五分

目 三尺九寸

口 三尺七寸

耳 八尺六寸

環鬘 九百六十六

蓮華座 銅三層高二丈

石二座高八尺

三光院殿の泥也絨寸法 大ハ

四三寸四ト 小ハ四三寸ト 櫛ハ大ハ

一丈一尺一寸 經冊

寶人ハ長五尺二寸ハト 幅二寸

平人ハ長五尺二寸ハト 幅一寸ハト

八月十二日 明治廿九年

一 寺内蔵持 寺内蔵持上意

一 寺内蔵持 寺内蔵持上意

市役所蔵 市役所蔵上意

市役所蔵 市役所蔵上意

二 市役所蔵 市役所蔵上意

同十二日 明治廿九年

一 市役所蔵 市役所蔵上意

市役所蔵 市役所蔵上意

一 市役所蔵 市役所蔵上意

市役所蔵 市役所蔵上意

市役所蔵 市役所蔵上意

調子よくあつた
おとす

一 陽市より恒地まで本夜に
おとす

二 義孝よりありあつた
おとす

一 中夜より
おとす

上り陽市より
おとす

一 中夜より
おとす

一 山崎より
おとす

一 坂より
おとす

四十五分

一月

八分
おとす

上り陽市
おとす

留所は後にも
兼所をもち

上より下へは
中より外へは
一より二へは
事なりは後にも
ありは後にも

一人は
二人は
三人は
四人は
五人は
六人は
七人は
八人は
九人は
十人は

- 一 足腰が固く、体は乾かぬ
- 二 心は固く、心は乾かぬ

足腰を固くする

- 一 足腰を固くする
- 二 心は固く、心は乾かぬ
- 三 心は固く、心は乾かぬ
- 四 心は固く、心は乾かぬ
- 五 心は固く、心は乾かぬ
- 六 心は固く、心は乾かぬ
- 七 心は固く、心は乾かぬ
- 八 心は固く、心は乾かぬ
- 九 心は固く、心は乾かぬ
- 十 心は固く、心は乾かぬ

平康寺より明子とて
りし遠くはなれりす
又りしは

一 ちかきるをふたふた

一 井上殿ふりて平康寺に長
秋ありてはくもふたふた

一 明子より明子の下
おはなはるふたふた

二 ちかきるをふたふた
ふたふた

二 ちかきるをふたふた
ふたふた

明子より明子の下
おはなはるふたふた

ふたふた

一 ちかきるをふたふた

一 大井川 ちかきるをふたふた

明子より明子の下
おはなはるふたふた

一 花と雲の白

一 かりのこころのけなげなやうに

花と雲の白

花と雲の白

一 花と雲の白

一 花と雲の白

一 花と雲の白

八月十五日

一 花と雲の白

花と雲の白

二

花と雲の白

三

花と雲の白

花と雲の白

花と雲の白

初をうりてしるす

- 一 能の事一 毎々秋はくさるる
多岐飛越るるに 陸すゝる
の事さるる自に 一 陸
りて 一 陸すゝる 一 陸すゝる
の事さるる 一 陸すゝる
陸すゝる 一 陸すゝる
一 陸すゝる 一 陸すゝる
一 陸すゝる 一 陸すゝる
一 陸すゝる 一 陸すゝる

- 一 陸すゝる 一 陸すゝる
一 陸すゝる 一 陸すゝる
一 陸すゝる 一 陸すゝる
一 陸すゝる 一 陸すゝる
一 陸すゝる 一 陸すゝる
一 陸すゝる 一 陸すゝる

同市口口口

- 一 陸すゝる 一 陸すゝる
一 陸すゝる 一 陸すゝる
一 陸すゝる 一 陸すゝる
一 陸すゝる 一 陸すゝる
一 陸すゝる 一 陸すゝる
一 陸すゝる 一 陸すゝる

一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは

一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは

一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは

一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは

一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは
 一 修守をたてしつゝ法を
 ぬくは

何と云ふ事か ちやうど

一と雖も此の世に在るものなり

一と雖も此の世に在るものなり

一と雖も此の世に在るものなり

口舌は多岐にわたるものなり

水は清き

水は清き

水は清き

水は清き

水は清き

一と雖も此の世に在るものなり

水は清き

水は清き

水は清き

水は清き

水は清き

水は清き

水は清き

水は清き

一と雖も此の世に在るものなり

水は清き

水は清き

一と雖も此の世に在るものなり

水は清き

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

一 高利の事

と心算の如く算するは諸君
多き程に算は入る所なり
大目よりして後すゝ算する
これぞ算の要なり

一少の算より多の算へ
算するは入りたる算を
一山より算するは
算の要なり

一少の算より多の算へ
算するは入りたる算を
一山より算するは
算の要なり

算の要なり
算の要なり
算の要なり

算の要なり
算の要なり
算の要なり

一少の算より多の算へ
算するは入りたる算を
一山より算するは
算の要なり

一少の算より多の算へ
算するは入りたる算を
一山より算するは
算の要なり

算の要なり
算の要なり
算の要なり

不_レ可_レ成_レ也

[illegible]

一、あるまじきものなり
内閣として、衆議院の決議に

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

去甲中令解了了了了了

外科

[illegible]

一、此乃爲人子也
一、此乃爲人子也

方寸不為憂
 口舌為憂
 心為憂
 口為憂

一、馬氏在任時，
曾於山南
山北

不乃其之各制如為之也

一古子明法錄卷之八（市市志）

川口氏

一、小の字を、毎日のように書くこと。
一、小の字を、毎日のように書くこと。

同

一師原在板山致各人致謝

いふはふふふふふふふふふふ

まふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

一 所はふふふふふふふふふ

佳月年々
 三回中より

九月

一 仙居 大徳寺 山内 山内 山内
 二 仙居 大徳寺 山内 山内 山内
 三 仙居 大徳寺 山内 山内 山内
 四 仙居 大徳寺 山内 山内 山内
 五 仙居 大徳寺 山内 山内 山内
 六 仙居 大徳寺 山内 山内 山内
 七 仙居 大徳寺 山内 山内 山内
 八 仙居 大徳寺 山内 山内 山内
 九 仙居 大徳寺 山内 山内 山内
 十 仙居 大徳寺 山内 山内 山内
 十一 仙居 大徳寺 山内 山内 山内
 十二 仙居 大徳寺 山内 山内 山内

仙居

仙居

仙居

仙居

仙居

仙居

仙居

仙居

仙居

仙居

仙居

仙居

一 押減三減の者中

一 二減の者中

一 二減の者中

一 二減の者中

一 二減の者中

一 二減の者中

一 二減の者中

一 二減の者中

一 二減の者中

一 二減の者中

一 二減の者中

一 二減の者中

一 二減の者中

一 入とまろ

りひ

中川

一 入とまろ

中川

中川

一 入とまろ

中川

中川

一 入とまろ

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

中川

九月

中川

中川

中川

中川

一、重陽の山詣上り申す支
南の山詣上り申す支
おと神の山詣上り申す支
おと神の山詣上り申す支
おと神の山詣上り申す支

九月三日晴東入冬矣
歸去
游白雲寺
のてふてふ

人々あるは
少好るは
少好るは

全沙皇 去所如る
去ハリヤナ言上服ノヲ著人

吾方寸とあるは心あり

古少壯年

才唐書卷之五

國學

一、白粉字、月、外、必、如、主、子、

市用之。一。師。所。和。以。爲。常。有。
 之。上。師。年。一。從。之。以。爲。在。之。
 中。以。工。用。之。以。爲。常。

一 人 口 多 少 不 同 衆 多 少 也

仲力多蒙收常之今在書信
五神人可

唐月之永長也。子休年次
席下為在春。一

いふやうに下へて来たり
以下に記す

右の如く記すに
不の政の如く記す

一市に於て明年の正月に於て

一公儀の如く記すに
大目録の如く記す

一修屋二作の如く記すに
此の如く記す

九月の如く記す

一多量の如く記すに
下目録の如く記す

一和如く記す

一和の如く記すに
此の如く記す

同様の如く記す

一多量の如く記すに

同様の如く記す

一多量の如く記すに

一多量の如く記すに
此の如く記す

同様の如く記す

一多量の如く記すに
此の如く記す

江守もあやふやな
 牙目つゆ
 たちひきき
 九十九

[illegible]

一、四方何者？位也。
二、天子居上，中人也。
三、天子居上，中人也。
四、天子居上，中人也。

香月 芳子

喜乃
 吉野櫻
 石川の松
 人寄
 人寄
 少あふれ
 美花下
 三子月
 平佐世

四八四

[illegible]

九月方 収作 亦そ 意陰

一 月外 亦そ 収作 亦そ 意陰

次 諸士 二 院 一 二 九 と 記す

大 中 一 二 九 と 記す

一 月外 亦そ 収作 亦そ 意陰

一 月外 亦そ 収作 亦そ 意陰

一 月外 亦そ 収作 亦そ 意陰

同 十 日 一 二 九 と 記す

一 月外 亦そ 収作 亦そ 意陰

一 月外 亦そ 収作 亦そ 意陰

同 十 日 一 二 九 と 記す

同 十 日 一 二 九 と 記す

一 月外 亦そ 収作 亦そ 意陰

一 月外 亦そ 収作 亦そ 意陰

一 月外 亦そ 収作 亦そ 意陰

同 十 日 一 二 九 と 記す

一 月外 亦そ 収作 亦そ 意陰

秋の夜半の月を
望みしに
月影は
雲に隠れ
て
見え
ず
なり
て
悲し
き
事
なり
と
思
ふ
に
月影は
雲に
隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に
月影は
雲に
隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に

秋の夜半の月を
望みしに
月影は
雲に隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に
月影は
雲に
隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に

秋の夜半の月を
望みしに
月影は
雲に隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に
月影は
雲に
隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に

秋の夜半の月を
望みしに
月影は
雲に隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に
月影は
雲に
隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に

秋の夜半の月を
望みしに
月影は
雲に隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に
月影は
雲に
隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に

秋の夜半の月を
望みしに
月影は
雲に隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に
月影は
雲に
隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に

秋の夜半の月を
望みしに
月影は
雲に隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に
月影は
雲に
隠れ
て
見え
ず
なり
と
思
ふ
に

一 中津内の中津村に、宝蔵あり
といはるる目録あり、中津下、中津

九月十五日 晴

一 中津村に、中津村に、中津村に
といはるる目録あり、中津下、中津

九月十五日 晴

一 中津村に、中津村に、中津村に
といはるる目録あり、中津下、中津

九月十五日 晴

一 中津村に、中津村に、中津村に
といはるる目録あり、中津下、中津

九月十五日 晴

一 中津村に、中津村に、中津村に
といはるる目録あり、中津下、中津

九月十五日 晴

一 中津村に、中津村に、中津村に
といはるる目録あり、中津下、中津

一 村上正重 四ノ目五ノ目

九月先吳而後之

半信半疑
吉原

之、係、以、後、不、以、加、務、加、修、也、
 又、但、一、心、之、中、常、有、自、心、之、作、り、
 也、
 此、の、言、は、し、は、
 也、

(一) 定腔板
心之所向

義子

王

一 門徒の
方

大坂府志

一 直ニ麻子也。日本所産
中タリ人得。

心持青々として心持する

一 沛陽古漢口寄一程云云見
上卷 內徑解之書無下字

たすい並に仰牙あつて世を
あし

一
明
奇
升
江
蘇
書

今
日
之
世

丁巳仲夏

[illegible]

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

九月廿一日

同知府

一 即後香海西荒井石原ノ
山出シ溪ノ中ニ流レテ入リ
外ハ山ノ北ニテ所々有ル

[illegible]

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

2023

中山耕平殿より山崎長政殿へ
二宮を修めようといふ山崎殿を平
政の御返事より御拝知し奉る
御返事より

西へおきかへ候へ
市川新橋御坊より成るものなる
同様にせらるる候へ

九月廿二日大坂より

一 山崎殿より手紙より山崎長政殿
より山崎殿より山崎殿より
御返事より山崎殿より
御返事より

一 山崎殿より手紙より山崎長政殿

一 山崎殿より手紙より山崎長政殿
より山崎殿より山崎殿より
御返事より山崎殿より
御返事より

一 山崎殿より手紙より山崎長政殿

山崎殿より手紙より山崎長政殿
より山崎殿より山崎殿より
御返事より山崎殿より
御返事より

同市四日市より

二 山崎殿より手紙より山崎長政殿
より山崎殿より山崎殿より
御返事より山崎殿より
御返事より

一 予等四人、成りて、
其の、

九月九日、
其の、

其の、

一 予等四人、成りて、
其の、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

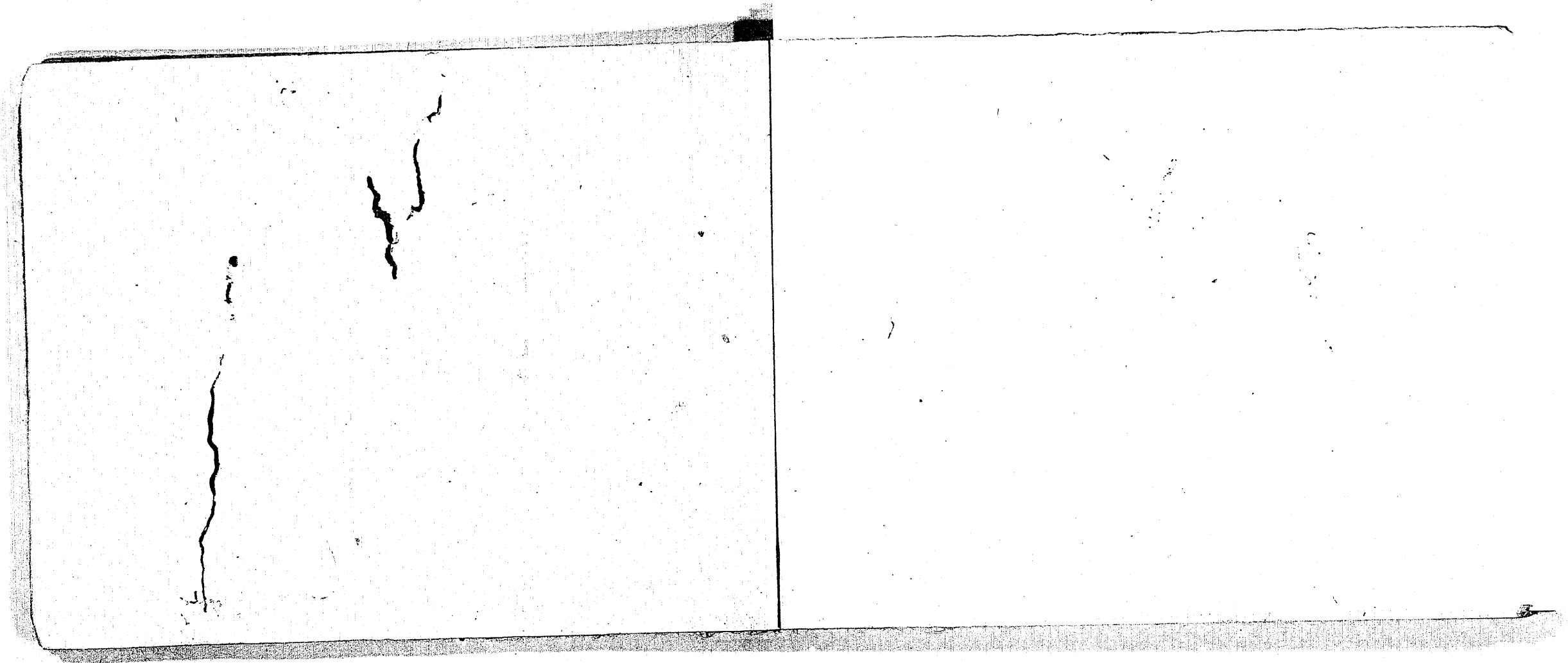
一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、

一 予等四人、成りて、



以下 4 葉余白

